

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 3 8 号

2022 年 2 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第 1 の手紙講解説教」より (8)

試 錬

あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。

あなた方を耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」

(コリント I 10・13)

このような事実を省みて、そしてこれに打ち勝てと、打ち勝つ力が与えられているということをパウロが述べた箇所でありまして、慰め深い場所であります。この事実は、我々に対する警告であることを述べ、12 節では「立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい」と言っており、ここが本日の山であります。汝自身、自分で立てると思って自分に頼るな、神に頼れと、ということであります。我々が自分に頼っている時には誘惑に勝てません。我々は他人が間違いをやっているのを見て、自分はそんなことをしないと思っておりますが、大体において、自分の場合となると、同じことをやってしまいます。

自分に頼っていたら過ちを犯します。即ち、神を信ぜよと言っています。13 節に、神は、「のがれる道も備えて下さる」とあります。誠に慰め多き言葉であります。この「のがれる道」とは、逃げる道ではありません。其れに打ち勝つという言葉です。打ち勝つ道を神が備えている、という。その道の最も代表的なものは、…蛇を見上げたものは救われるという道であります。即ち、「イエス・キリストの十字架を仰ぎ見ること」であり、これが「逃れる道、方法であります。

自分自身の何ものにも頼らず、十字架に頼ることです。この道は、我々を永遠の生命に導く道であると同時に、我々の日常生活において、あらゆる誘惑に打ち勝つ道であります。

Example is better than precept.

天国に行くために、神に与えられた自分の仕事に励むことが、あらゆる試みに打ち勝つ最もよい方法であると思います。相撲でも、豊山が弱いのは、立ち合いが悪いためらしい。一気に突っ込めないらしい。我々には各自与えられた仕事があります。その責任に向かって真剣にやったなら、敵に対して、攻め込むすきを与えません。私は特に、この教会に来て下さる方々にお願いしたい。自分の義務を真剣に果たそうという精神がなければ、この教会に何回来て下さっても意味はないと思います。中学で習ったように、「Example is better than precept.」(実例は教訓に勝る。)であります。パウロはそういう人でした。自分で精進するところを見せました。

我々は、立っているようで、転ぶ可能性が十分あります。しかしながら、野がるべき道もあること学びました。イエス・キリストの贖いがあります。どうぞその贖いによりまして、我々の行き先が栄化復活である、というその目当てをがっちりさせて、十字架を見上げて、そして、自分の与えられた仕事に精を出すようになりたいと思います。娯楽自体は悪いものではありませんが、それに浸っているうちに自分の仕事がおろそかになる可能性があります。信仰もなくなってきました。注意を要します。

諸君、やってみたまえ

この 10 年前の説教には、「主の御名を呼ぶ」すなわち「称名」については、まだ出て来ておりません。ここでは、ヨハネ伝とヘブル書に出てくる「主を見上げる」という「行」しか述べておりません。「誘惑に勝つ」ということは「己に克つ」ということです。己に克つにはどうしても我々に「行」が必要になって来ます。頭だけでは駄目です。その行は、「主を見上げる」とことと、ロマ書 10 章 9-13 節に出てきた「主の御名を称える」という「行」です。「主は我が救い主である」と口で告白することと、手では目の前の義務を果たす。これは、イエス・キリストの贖いから来る。贖いがある、神の子とされ、復活して、永遠の生命に与かるということがはっきり確立していなければ、力は出ません。私は、ここで、そのことを述べていますが、それを固く信ずる事が出来れば、自然と己に勝つ力が与えられて来ます。ただ、悪いことをするな、朝寝をするなど言っても駄目です。人間というものは、朝寝をしなくなったら夜更かしをします。「己に克つ力」これが根本的主張です。その力は、信仰と望みから来ます。「わが主イエスよ」ということは、「イエスは我が贖い主である」ということです。主を見上げるのも同じです。復活の望みがついてきます。この「復活の望み」がついて来る時に、我々に「己に克つ力」が付いて来ています。諸君やってみたまえ。

パウロの勧め

すべてのことは許されている。しかし、すべてのことが人の徳を高めるのではない。誰でも自分の益を求めないで、他の人の益を求めるべきである。

(コリント I 10・23-24)

パウロは人類を3つに分けまして、ユダヤ人、ギリシア人と教会の信者に分けてきました。その3種類の人々の誰に対しても、その人々の利益になるようにせよと言っています。最後に、私がそのようにやっていると。キリストがそうであつたので、それにならっているのだから、君達も私にならって欲しいと言っています。ある学者は、肉を食べるか否かの問題は、我々がお酒を飲む場合にも応用したらよいと言っております。パウロの結論は誠に平凡な結論ではありますが、パウロは供え物である肉の問題一つを捕えて、それを掘り下げて、終には我々の生活の根本的な態度の原理を示したことは、誠に注目すべきことでもあります。

デビッドソンの言葉

わたしがキリストにならう者であるように、あなた方も私にならう者となりなさい。(コリント I 11・1)

スコットランドのデビッドソンという人(有名な聖書注解者)は、「良く送られた、平凡なる生涯は、すべての行為のうちで、最も偉大である」(an ordinary life lived well is the greatest of all deeds.)と言いました。私は非常に感銘を受けました。イエス・キリストも、大工としてある意味では誠に平凡な生涯を送られました。私の尊敬する中江藤樹先生は、儒者を辞めて田舎に帰って、農民と共に小さい村の商人となりました。農民を相手にお話しされるというだけの平凡なご生涯でありました。それがあの大きな感化を残されました。パウロも平凡なテント職人でした。デビッドソンの「the greatest」という字に注目して下さい。偉いことには、ノーベル賞やオリンピックの金メダルがありますが、それらはたしかに「a great thing」であることには相違ないが、「the greatest thig」ではないと思います。「最も大なる」と言えることは、ここでいう「よく送られた平凡なる生涯」であります。最も偉大なものは万人の手の届くところにあります。我々は真に、誰でも今日学んだ如く、他の角度から深く見る時に、平凡なることが大切であることが分かる。内村先生も、「後世への最大遺物は、正しき生涯であると」と言われました。

目の前に置かれた今日の仕事をなすこと

本日は、「すべてのことを神の栄光のために行うこと」を学びました。この平凡な生活を神と共に天国を目当てに歩む時に、神の栄光のために生涯を生きることができます。「神のために」は「人のため」です。具体的に言えば、「人のため」は「自分の目の前に置かれた今日の仕事をなすこと」です。聖書の最も良き注解は人であります。聖書の福音は、人から他の人へ移って行きます。人間が人間を見て真似をするのです。福音というものは人の生活で伝わるのです。

「おはよう」の言い方で決まる

シュバイツァー博士のアフリカでの活躍は偉大なことでもあります。また、韓国の安先生が来日されて、偉大なる信仰の証の話をして、日本人に大きな感銘を与えられました。しかしデビッドソンの言葉を借りるならば、それらは偉大な行為ではあるが、最も偉大な行為とは言えないと私は思います。最も偉大なる行為は、各人の手の届くところにあります。すべての人はシュバイツァー先生や安先生の真似は出来ません。我々は日常の生活の中で、朝、人に会ったら、「おはよう」という言葉はだれでも言えます。相手に対して尊敬と愛と励ましを与える「おはようございます」が言えればよい。この普通のことが出来るようにならねばなりません。「おはよう」の言い方で、その人が決まります。

我々は、外へ出て行って善行をする必要はありません。自分置かれた立場でよろしい。余裕のある場合は外へ出ても良いかもしれない。私は伝道師だから、福音を宣伝すればそれで良い。小西はこの高円寺東教会で伝道すればそれで足ります。これをもって、私の人生の目的は達しています。他に善行をする意志もなければ力もありません。

女の頭は男、キリストの頭は神

すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神である。(コリント I 11・3)

私は、女の地位を高めたのはキリスト教であると申しましたが、そのキリスト教の根本教理を説いたのはパウロであると思います。パウロは、「キリストを信じたものは、新しい創造物である」と言いました。そこには、奴隷もなく、男もなく女もない、全てが新しくなった、と。これは革命的なパウロの言葉であります。そのパウロが今回のような主張をしているところに注意する必要があります。パウロは男女同権、尊厳と意義と価値においては同じであることは認めています。このパウロの原則が女子の地位を高めました。それと同時に、この世において、女子の職分、責任は、「男を助けること」にあるという。職分、機能が異なるという。働きの分野が違うという。……この世においては、機能と責任とは違います。こういうことを混同してはいけません。「従属していること」と「劣っていること」とは違います。会社でも、課長は社長に従属していても、課長が劣っていることにはならない。社長よりも、課長が出来ている場合の方が多いかもかもしれません。その方が会社が発展します。人間の救いの尊厳が分かっています。我々がもし、永遠の生命の尊厳が分かっているならば、この世ではどんな職分でもよい。人の嫌がる仕事の方がむづかしい。…立派な人間は、難しい役を一生懸命にやったものから出て来ます。君らも注意したまえ。

一つの意味によって統一されることが理想

私は、家庭に二つの権威は不要だと思います。妻が主人に従わないような家庭には幸せが来ません。論より証拠、そんな家庭からは立派な子供は生まれません。パウロはどうですか。イエスはどうか。「この世においては低きにつけ」と言いました。イエスは大工でした。パウロはテント職人でした。この頃の学生は、良い大学に入ることばかり考えている。本当の偉大さはどこにあるかを知らない。わかっていないから世の中が混乱する。「従属」の尊さを知らない。…国家でも同じことです。理想国家を目指してがやがややっているが、私は君主専制の国が一番良いと思っています。私は政治家ではないので、こんなことを言うと君らに笑われるかもしれませんが、専制君主国になって害があるというのは、君主が悪いから害がある。もしも、立派な人が専制君主になれば、実に理想的な国家が出来ると思います。多数決といってもゼロが多数集まってもゼロにしかありません。事実、歴史が証明します。天国はキングダム（王国）です。仏教でも、「仏」がオールマイティーです。

大きく成功していた会社が、労使問題でガタガタしてつぶれてしまった事例もあります。一つの国でも、会社でも、家庭でも、一つの意志によって統一されることが理想だと思っています。その意志を支えて、皆が周知を集めて、一つの意志となって働く。これが理想です。私はパウロの主張を古いとする米国などの聖書注解者の意見には賛成しかねます。